

第二種特定鳥獣管理計画(第5期カモシカ保護管理)中間報告

1 環境審議会における検討内容

(1) 実施日

令和元年5月28日(火)

(2) 意見及び対応

意見	対応
○計画書に初めに前文を入れ、理念を示すべき	○1.(1)計画策定の目的の項目に前文を追加。SDGsの目標を追加(P.1)
○カモシカを捕獲した場所での被害状況の動向の検証について	○シカとカモシカの食痕の判別は専門家でも難しいが、被害が出る時期に調査を行い、データの収集に努めていく。(P.18,35)
○カモシカの分布拡大と密度低下についてニホンジカとの関連をどう考えているか	○カモシカの生息適地はニホンジカと重なることが多く、影響はあると考えられる。特にニホンジカの生息先端部や高密度な地域では、今後調査地点の追加や、錯誤捕獲等のデータを収集する等、動向を注視する。(P.18,35)
○錯誤捕獲の際の対応について記載されたい	○錯誤捕獲等のデータの収集に努める。大型獣放獣の補助金も活用。(P.49)

2 カモシカ専門部会における検討内容

(1) 開催日

令和元年9月11日(水)・11月8日(金)

(2) 委員(敬称略)

部会長 岸元 良輔 (NPO 法人信州ツキノワグマ研究会理事長)
 副部会長 泉山 茂之 (信州大学農学部教授)
 委員 大平 重利 (林野庁中部森林管理局 計画保全部保全課)
 // 大矢 信次郎 (長野県林業総合センター育林部)

- 〃 黒江 美紗子（長野県環境保全研究所）
- 〃 清水 靖久（林務部森林づくり推進課鳥獣対策・ジビエ振興室）
- 〃 谷 和隆（長野県教育委員会事務局文化財・生涯学習課文化財係）

（３）カモシカ部専門会で作された意見及び対応

出された意見	対応
○前回計画策定時では、カモシカは林業被害が多く、計画内容も林業被害に関連した書き方になっている。最近は農業被害の割合が増えているので、農業被害に関する記述を追加してはどうか。	○防除対策の項目に電気柵や広域防護柵、緩衝帯整備等、農業被害対策に関する記述を追加。（P.42,43）
○八ヶ岳地域個体群等、生息密度が低い地域は、区画法で生息が確認できない場合もあるので、糞塊法も併用してはどうか。	○昨年調査では糞塊法も併用して実施したので、次回調査も実施の方向で考えている。その旨の記載も追加。（P.18）
○ニホンジカの密度が高い場所ではカモシカの密度が低くなる傾向があるので、八ヶ岳地域などは引き続き注視すること。	○前回調査の結果を踏まえ、今後、被害状況や錯誤捕獲の状況をするを記載。（P.18,35）
○今後、造林地が増加するとともに、スギヒノキを中心に再度、昔のように林業被害が増加する可能性があるため注意が必要。	○近年の民有林と国有林の造林面積の推移グラフを追加。今後予想される被害増加について記載。ニホンジカ被害も同様に増加する可能性があることも記載。（P.27～P.31）

2 特定鳥獣保護管理検討委員会における検討内容

（１）開催日

令和元年 11 月 15 日(金)

（２）委員(敬称略)

- 座長 上原 貴夫（上田女子短期大学教授）
- 委員 泉山 茂之（信州大学農学部教授）
- 〃 竹田 謙一（信州大学農学部准教授）
- 〃 武重 正史（長野県農業組合中央会）
- 〃 安原 輝明（長野県森林組合連合会）
- 〃 竹入 正一（長野県猟友会会長）

- // 辻 明子 (自然観察指導員長野県連絡会)
- // 岸元 良輔 (NPO 法人信州ツキノワグマ研究会理事長)
- // 大平 重利 (林野庁中部森林管理局 計画保全部保全課)
- // 陸 齊 (長野県環境保全研究所)
- // 秋山 巖 (長野県林業総合センター育林部長)
- // 清水 靖久 (林務部森林づくり推進課鳥獣対策・ジビエ振興室)

(3) 特定鳥獣保護管理委員会が出された意見及び対応

出された意見	対応
<p>○林業被害の増加に関し、カラマツの多くが主伐期を迎え、苗木の食害が懸念される。注意喚起ではなく総合的な対策が具体的に分かる記載にしてほしい。</p>	<p>○林業対策については被害防除の項目に記載。(P. 42)</p> <p>○環境保全研究所での胃内容物の分析結果によると、カモシカによる被害はスギ・ヒノキが中心でカラマツへの食害は無かった。カラマツへの被害は樹皮も含めたニホンジカの被害が懸念される。</p> <p>○カモシカの被害が多いのは根羽村、売木村で樹種はヒノキが中心。カラマツ被害が多いのは飯田市で、主にニホンジカによる被害。あわせて主伐に伴う新植地ではノウサギの被害が懸念される。</p>
<p>○表 3-3 に関し、八ヶ岳地域個体群の区画法による生息密度の調査結果が 0 頭/km² となっているが、痕跡は確認されているので、今後、調査地点の変更や追加、糞塊法等の調査も併用すると調査精度を向上させることを検討されたい。</p>	<p>○八ヶ岳地域個体群のように密度が低い個体群については、今後調査地点の追加や糞塊法等のデータの収集に努め、個体群の状況を把握する。(P. 18, 35)</p>
<p>○忌避剤について、有効期間 3～6 ヶ月の記述に対し、「年 1 回は散布」の表現の適否はどうか。</p>	<p>○冬期のスギ、ヒノキを想定しており、効果が 6 か月継続される前提で部会議論を踏まえた記載としている。(P. 43)</p>